

意見文 三（千二百字） 十二本

一日一本。読み終えたら、本文のすぐあとの課題欄に書きこもう。

第一回 雑草

第二回 竹と櫨

第三回 自転車の練習

第四回 料理の味つけ

第五回 森の木

第六回 クラスの係

第七回 検索と自分で考える

第八回 公式と理由

第九回 ガイドブックと旅

第十回 レシピと料理

第十一回 翻訳機と外国語

第十二回 計算機と暗算

第一回 雑草

道ばたや空き地、アスファルトのすき間。人の手が入らない場所にも、雑草はいつのまにか芽を出し、抜いても抜いてもまた生えてくる。その姿を見て「雑草は強い」と感じる人は多いだろう。では、ここでいう強さとは、いったい何を指しているのだろうか。

一般的に、強いとは、太く、硬く、大きいことだと考えられている。強い植物といえば、太い幹を持ち、枝葉を大きく広げる大木を想像する人が多いだろう。ほかの植物より高く育ち、日光を独占する。競争に勝ち、ほかを押しのけて立つものこそが強いのだと、多くの人は考えている。

ところが、本当に生き残るのは、折れずに形を変えるもののほうである。硬いものは、思いがけない大きな力が加わると、一度で折れてしまう。これに対して、しなるものは、その力を受け流すことができる。雑草は太くも硬くもなく、光をめぐる競争では大木にかなわない。にもかかわらず生き残っているのは、踏まれれば低くはい、刈られれば根もとからまたのびるからだ。周囲の環境に合わせて、自分の形や生き方を変えているのである。

日当たりのよい開けた場所と、人によく踏まれる道ばた。同じ種類の雑草でも、生える場所によって姿は大きく異なる。開けた場所では、背を高くのばして葉を広げる。ところが、道ばたでは、くきを地面にはわせ、低く広がって育つ。踏まれても折れないのは、はじめから低く、やわらかい形をとっているからだ。仮に道ばたで背を高く、硬くのばしていたなら、一度踏まれただけで折れてしまうだろう。決まった形に固執せず、その場に適した形になる。この柔軟さがあるからこそ、雑草は大木の育たない場所でも生きていけるのである。

道ばたや土手では、ときどき草刈りが行われる。そこに多いイネ科の草は、のびる部分（成長点）が根もとの近くにある。そのため、上のほうを刈り取られても、のびる部分は無事に残り、すぐにまた葉をのばす。刈られるたびに、こりずに同じ場所から芽を出す。これは、刈られることにさからうのではなく、刈られることを前提にして、体のつくりを変えた結果である。刈られて困るのは、むしろ、先端に成長点をもつ背の高い植物のほうだ。一度切られれば、のび直すまでに長い時間がかかる。刈られても平気な雑草と、刈られると弱る背の高い植物。どちらが変化に強いかは明らかだろう。

このように、雑草の強さとは、大きさや硬さによる強さではなく、変化に合わせる強さである。太く硬い大木が、ふつうの風や雨にはびくともしないことを否定はしない。その意味では、大木もまた強い。けれども、思いがけない力に対して生き残るのは、折れずに形を変えるもののほうである。これがないことより、変わりつづけられること。雑草の生き方は、強さの意味をそう教えている。

第一回 雑草 課題

課題一 筆者の主張を一文で書こう。

課題二 一般論の段落は何段落目だろう。() () 段落目

第二回 竹と櫓

強い風がふく日に、竹林を見たことがあるだろうか。竹は、大きく曲がりながら風をやりすごし、風がやめば何ごともなかったように立ち直る。いっぽう、硬くて太い木が、同じ風でたおれたり、えだを折られたりすることもある。強いとは、いったいどういうことなのだろうか。

ふつつ、強いとは、太く、硬く、大きいことだと思われる。櫓は、日本の木のなかでも特に硬い木である。重く、きめが細かく、道具の柄や木刀に用いられるほど丈夫だ。多くの人は、どんな力にも曲がらない櫓のような木こそ、強さの見本だと考えるだろう。

しかし、折れずに形を変えるもののほうが生き残る。硬いものは、思いがけない大きな力が加わると、一度で折れてしまう。これに対して、しなるものは、その力を受け流すことができる。竹は中が空どうで、櫓のような硬さはもたない。けれども、風がふけば大きくしなり、風がやめば元の形にもどる。力に正面から対抗するのではなく、受け流すことによって、竹は折れずにすむのである。

たとえば、大きな台風が通過した翌朝の山を歩くと、硬くて太い木が、根もとからたおれていたり、太いえだを折られていたりするのを目にする。硬い木は、風に正面からさからう。風の力がその木の硬さの限度をこえた瞬間、木は一度に折れる。これに対して、竹林の竹は、台風之夜、地面につきそうなほど曲がって風を受け流す。そして翌日には、また元のように立っている。竹は中が空どうで、節があり、軽い。そのため、大きくしなつても折れにくい。硬さで風に勝とうとせず、曲がることで風に負けない。それが竹の生き方である。

雪の多い地方の冬。重い雪が積もると、竹は雪の重みで弓のように曲がり、先が地面につくこともある。しかし、雪が落ちれば、竹はまた起き上がる。これに対して、硬い木のえだは、雪の重みに耐えつづけ、ある限度をこえた瞬間に、音を立てて折れてしまう。「柳に雪折れなし」ということわざがある。やわらかく曲がる柳のえだは、雪の重みで折れることがない、という意味だ。昔の人も、しなやかなものが雪に耐えることを、経験から知っていたのである。硬さは、限度をこえるまでは頼もしい。だが、限度をこえた先には、折れるという結末しか残されていない。

本当の強さとは、硬くて曲がらないことではない。大きな力を受けてしなり、また元の形にもどれることこそが、折れない強さなのである。もちろん、櫓の硬さにも価値はあり、道具の柄として長く使われてきたのはそのためだ。けれども、思いがけない力の前で生き残るのは、硬いものではなく、しなやかなものである。曲がることは、負けることではない。折れないための知恵なのである。

課題一 筆者の主張を一文で書こう。

第二回 竹と櫨（課題のつづき）

課題二

一般論の段落は何段落目だろう。（

）段落目

第三回 自転車の練習

自転車に乗れるようになった日のことを、覚えているだろうか。何度も転び、ひざをすりむき、それでもまた乗る。乗れるようになるまでには、たいてい、そうした時間がある。あの転んばかりいた時間に、はたして意味はあったのだろうか。

多くの人は、失敗はさけるべきもので、成功だけに価値があると考え。転べば痛いし、時間も無駄になる。転ばずに一度で乗れるのが最もよい。できることなら転びたくない、と思うのは自然な感情である。転ばない子はえらく、転ぶ子はへたなのだと、つい思ってしまう。

けれども、失敗とは「うまくいかない方法を一つ見つけた」ことである。ハンドルを切りすぎて転べば、「切りすぎるとたおれる」とわかる。下を見て転べば、「前を見たほうがよい」とわかる。転ぶたびに、体はうまくいかない方法を一つずつ記憶していく。反対に、転ぶのおそれて乗らなければ、転ぶことはない。けれども、それは、できることしかしていないということだ。それでは、いつまでたつても乗れるようにはならない。失敗を避けることは、成長を避けることとほとんど同じなのである。

補助輪を外した日。最初は、こぎ出した瞬間にふらついて、足をついてしまう。次は、少し進んでからハンドルを切りすぎてたおれる。その次は、下ばかり見ていて、まっすぐ進めない。一回ごとに転ぶ方が異なり、一回ごとに「これはだめだ」と体が覚える。こぎ出しは強く、ハンドルは小さく、視線は前に。そうやって、だめな方法を一つずつ消していった先に、ある日ふつと、転ばずに進める瞬間が訪れる。乗れた瞬間は一回だけだ。けれども、そこまでに転んだ回数のおんだだけ、体は多くのことを学んでいたのである。

また、転ぶのをいやがって、いつまでも補助輪をつけたままの子もいる。補助輪があれば、たしかに転ばない。失敗は一度も起こらない。しかし、補助輪付きの自転車で走れるのは、もともと走れるはずの場所だけである。転ばない代わりに、転ばないとわかっていいることしかしていない。バランスを取る力は、補助輪がある限り、一度も試されない。したがって、一年たつても二年たつても、補助輪を外せば転ぶままである。失敗を完全に避けた結果、できることが一つも増えていないのだ。転んだ子は乗れるようになり、転ばなかった子は乗れないままにいる。

こう考えると、転ぶことは、乗れるようになるまでの回り道ではなく、乗れるようになるための道そのものである。たしかに、転ばずにすむならそれに越したことはなく、けがをしない工夫は必要だろう。けれども、転ぶことを恐れて乗らないのでは、乗れる日は永遠に来ない。本当に恐れるべきなのは、転ぶことなく、転ぶのおそれて自転車に乗らないことなのである。

第三回 自転車の練習 課題

課題一 筆者の主張を一文で書こう。

課題二 一般論の段落は何段落目だろう。() () 段落目

第四回 料理の味つけ

初めて料理をしたとき、味つけで失敗した経験はないだろうか。しょうゆを入れすぎてしょっぱくなったり、味がうすくてぼんやりしたり。食べられないほどの失敗もあったかもしれない。そうした失敗は、材料と時間を浪費しただけの、ただの無駄なのだろうか。

もちろん、失敗はさけるべきもので、成功だけに価値があると考える人は多い。料理であれば、レシピの通りに作り、一度でおいしく仕上げるのが理想だ。材料を無駄にし、おいしくないものを食べるくらいなら、失敗はしないに越したことはない。多くの人はそう考える。

だが、失敗とは「うまくいかない方法の一つ見つけた」ことである。しょっぱければ、次は少なくすればよいとわかる。うすければ、次は足せばよいとわかる。失敗するたびに、「ちようどよい」の位置が、少しずつ明確になっていく。反対に、失敗をおそれてレシピの通りにしか作らなければ、失敗はしない。けれども、それは、できることしかしていないということだ。レシピにない材料を前にしたとき、その人は何も作れない。

たとえば、初めてみそ汁を作るとき、みそをどれだけ入れればよいか、見当がつかない。思いきつて入れたら、しょっぱくて飲めなかった。翌日、こんどは少なめにしたら、お湯のようにうすかった。三日目、前の二回の中間くらいの量にしてみたら、ちようどよかった。一回目の失敗は「多すぎる」を教え、二回目の失敗は「少なすぎる」を教えた。二つの失敗にはさまれて、「ちようどよい」の位置が見えてきたのである。もし一回目でこりて作るのをやめていたら、ちようどよい味には、いつまでもたどりつけなかっただろう。

また、長く台所に立ってきた人は、はかりを使わずに味を決めることができる。これを目分量という。レシピの数字を見なくても、手に取った量と、なべの中の様子だけで、ちようどよい味に仕上げてしまう。この力は、生まれつきのものではない。何度も作り、何度も「今日はしょっぱい」「今日はうすい」と失敗してきた、その記憶の蓄積である。失敗の一つ一つが、「この量ではこうなる」という知識として体に残っている。つまり、目分量とは、数えきれない失敗を一つにまとめた知恵なのである。失敗を避け、レシピの数字どおりにしか作らない人には、この知恵は身につかない。

このように、味つけの失敗は無駄ではない。しょっぱすぎた一皿も、うすすぎた一皿も、ちようどよい一皿への道しるべである。同じ失敗を何度もくり返すだけでは意味がない、という考えにも一理ある。問われるのは、失敗から何を学んだかだろう。けれども、学ぶべき失敗がそもそもなければ、学びようもない。失敗した数だけ、味は確かになっていく。失敗を恐れて作らないことこそ、本当に恐れるべきことなのである。

第四回 料理の味つけ 課題

課題一 筆者の主張を一文で書こう。

課題二 一般論の段落は何段落目だろう。() () 段落目

第五回 森の木

山を歩くと、同じ種類の本が整然と並んだ林と、さまざまな木が入り混じった林とがある。前者は、人が植えて育てた林であることが多く、後者は、自然に育った林であることが多い。この二つのうち、どちらが「強い林」なのだろうか。

一般的に、同じにそろえるほうが効率がよく、公平だと考えられている。同じ木をそろえて植えれば、成長の速さがそろい、手入れも容易になる。切り出すときも、同じ大きさの木がまとめて得られる。林を育てる側から見れば、均一にそろっているほうが無駄がないのである。

ところが、違いがあるから、全体が変化に耐えられる。同じ木ばかりだと、一つの病気、一つの変化で、全部がだめになる。その木だけを枯らす病気や虫が侵入すれば、林は一度に枯れてしまう。これに對して、さまざまな木が混じった林なら、ある木が枯れても、ほかの木は残る。効率のよさと、変化への強さは、別のものである。そろった林が失っているのは、違いという備えなのだ。

松だけが植えられた林。松には、松だけを枯らす虫の害がある。松くい虫とよばれる被害で、これが入ると、松は一本、また一本と枯れていく。林が松ばかりであれば、虫となりの松へ、そのまたとなりの松へと、どこまでも広がっていく。同じ木がすぎ間なく並んでいることは、虫から見れば、えさがかどこまでも続いているということでもある。気がつけば、林の全体が茶色く枯れてしまう。ところが、松のあいだに、くぬぎやならといった別の木が混じっていれば、事情は異なる。虫は松しか枯らせないから、松の少ない林では広がりにくい。松が枯れた場所も、ほかの木が残り、林は林のまま存続する。違う木が混在していることが、林を守る壁となっているのである。

また、同じ種類の本ばかりの林は、強い風や大雪にも弱い。同じ種類の本を同じ時期に植えた林は、高さも太さも根の深さも、ほぼ均一である。そのため、ある強さの風がふくと、どの木も同じように耐えきれず、一斉になぎ倒されやすい。一本一本が、同じ弱点を共有しているからである。これに對して、高い木と低い木、根の深い木と浅い木とが混在する林では、風の受け方がそれぞれ異なる。高い木が風を弱め、低い木が土をおさえ、たおれた木があつても、周囲の木がすぎ間をうめていく。全体として、林は形を変えながら残りつづける。均質な林は一つの弱点で全体がくずれが、多様な林は、一部を失っても全体は保たれるのである。

そろった林は、一見美しく効率がよい。木材を得るという目的に限れば、そろった林のほうが合理的であることを否定はしない。けれども、病気や風雪といった変化に強いのは、違う木が混じった林のほうである。違いは、無駄ではなく、生き残るための備えなのだ。次に山を歩くとき、きれいに並んだ林と入り混じった林とが、少しちがって見えてくるだろう。

第五回 森の木 課題

課題一 筆者の主張を一文で書こう。

課題二 一般論の段落は何段落目だろう。() () 段落目

第六回 クラスの係

クラスの係を決めるとき、どのように分けるのがよいだろうか。全員が同じ仕事を同じ分量だけ担当するのか。それとも、得意なことに応じて分けるのか。どちらのクラスのほうが、うまく機能するのだろうか。

ふつう、同じにそろえるほうが効率がよく、公平だと思われる。全員が同じ仕事をすれば、だれかだけが楽をすることがない。決め方も単純で、不満も出にくい。みんな同じなのだから、不公平だと言う人はいないはずだ。公平とは、同じにすることだと、多くの人は考えている。

しかし、違いがあるから、全体が変化に耐えられる。全員が同じことしかできなければ、だれにもできないことが一つ生じたとき、クラス全体が停止してしまふ。得意が違うから、一人ではできないことが、クラスとしては可能になる。だれかが休んでも、別の得意をもつ人が、別の方法で穴をうめられる。同じものばかりでは、一つの穴で全体が止まるのである。

たとえば、学芸会で劇をするには、台本を書く人、大道具を作る人、音楽を流す人、全体の進行を決める人が必要だ。絵の得意な人が背景を描き、文章の得意な人が台本を直し、声の大きい人が司会をする。一人で全部をやろうとすれば、どれも中途半端になる。しかし、得意の異なる人が集まれば、一人ではとてもできない大きな劇が、クラスとして形になる。しかも、本番の直前に司会の人があんなに休んでも、台本を直した人は劇の中身を熟知しているから、代わりに話すことができる。得意が重なっていないからこそ、全体が回り、穴があいても、別の方法でふさげるのである。

あるクラスが、公平を重んじて、係を全員同じにした。黒板消しも、配りものも、掲示物づくりも、全員が同じ日数ずつ担当する。一見、これほど公平な決め方はない。ところが、掲示物づくりの当番の日に、絵の苦手な人ばかりが重なると、作業は進まず、できあがりも不ぞろいになる。だれも得意を生かせず、だれも不得意を補ってもらえない。全員が同じ役割を担うということは、全員が同じ弱点を抱えるということでもある。一つの苦手が、クラス全体の停滞につながる。均等に分けたはずの仕事が、かえって全体の動きを鈍くしてしまうのである。

このように、得意が違うことは、不公平ではない。全員を同じにそろえる決め方にも、だれも損をしないという点で一理ある。けれども、違いがあるからこそ、クラスという全体は回り、思いがけないことが起きても止まらずにすむ。同じにそろえたクラスは、一つのつまずきで全員がつまずく。得意の違うクラスは、だれかがつまずいても、別のだれかが立っている。そろえることより、違いを生かすこと。それが、クラスを強くする道なのである。

第六回 クラスの係 課題

課題一 筆者の主張を一文で書こう。

課題二 一般論の段落は何段落目だろう。() () 段落目

第七回 検索と自分で考える

宿題でわからない言葉が出てきたとき、あなたはどのようなだろうか。今は、スマートフォンに言葉を打ちこめば、数秒で答えが表示される。調べることに、ほとんど時間はかからない。では、調べて答えを知ることと、自分で考えることは、同じことなのだろうか。

世間では、知識が多い人が賢いと思われている。答えが早く出るほうが優れている、と多くの人は考える。検索を使えば、だれよりも速く、大量の情報を集めることができる。だから、調べる技術さえ身につければ、学ぶことの大半は済んだと感じる人も少なくない。

ところが、知ったことをつなげて考えることこそが、本当の力である。知るだけなら、機械のほうがはるかに上だ。検索は、人の何倍もの情報を一瞬で集めてくる。けれども、集めた情報どうしを結びつけ、その内容を疑い、自分の問題に当てはめることは、人にしかできない。答えを知っただけでは、その答えが自分の疑問とどう関係するのか、そもそも信じてよいのかは、何もわからないのである。知識は、つなげられてはじめて意味を持つ。

社会の宿題で、なぜ川の近くに町が多いのかを調べることになった。検索すれば、「水が得やすいから」「船で物資を運べるから」という答えが即座に見つかる。それをそのまま書き写せば、宿題は終わる。けれども、ここで一步考えてみる。自分の住む町の近くに川はあるか、昔の地図と現在の地図で町の広がり方はどう異なるか、と確かめてみる。すると、調べた答えが、自分の町の歴史と結びついてくる。「船で運べる」という一文が、自分の町に残る古い船着き場の跡と重なったとき、知識ははじめて自分のものになる。検索は入り口にすぎず、そこから先を歩くのは自分なのである。

また、調べた答えどうしが食いちがうこともある。ある歴史上の出来事について検索すると、一つのサイトには「ある年」と書かれ、別のサイトには異なる年が書かれていることがある。検索は、答えを並べることはできても、どちらを信じるべきかを決めてはくれない。ここで必要になるのが、疑う力である。だれが書いたか、いつ書かれたか、教科書や辞典の記述と一致するかを確かめる。そうやって照らし合わせて判断するのは、人の仕事である。情報が多く集まるほど、取捨選択する力が求められる。知識の量が増えるほど、むしろ考える力の重要性は高まるのだ。

つまり、知識は、つなげて考えられてはじめて自分の力になる。もちろん、知識が多いに越したことはなく、速く調べられることは大切だ。知らなければ、つなげることも疑うこともできないからである。しかし、調べて終わりにしてはいけない。調べたことを自分の知っていることと結びつけ、本当にそうかと問い直す。検索が速くなった時代にこそ、考える力の価値は高まるのである。

第七回 検索と自分で考える 課題

課題一 筆者の主張を一文で書こう。

課題二 一般論の段落は何段落目だろう。() () 段落目

第八回 公式と理由

算数の公式を、あなたはいくつ覚えているだろうか。三角形の面積は、底辺かける高さわる二。公式を覚えれば、問題は速く、確実に解ける。では、公式を覚えることと、なぜそうなるかを考えることは、どちらが大切なのだろうか。

多くの人は、知識が多い人が賢いと考える。公式を多く記憶していて、答えが早く出る人ほど算数が得意だ、と多くの人は考える。試験は制限時間が決まっているから、理由を考えている余裕はない。公式を記憶して当てはめるのが最も効率的だ、というわけである。

けれども、知ったことをつなげて考えることが、本当の力である。公式を記憶して当てはめるだけなら、計算機のほうがはるかに正確だ。けれども、三角形の公式がなぜ「わる二」なのかを考えると、長方形を対角線で半分に切った形が見えてくる。そうやって理由を理解すると、平行四辺形や台形の公式も、同じ発想で結びついてくる。公式どうしを関係づけ、目の前の問題にどれが使えるかを判断するのは、人にしかできない。記憶した公式の数ではなく、公式のあいだのつながりが、考える力の土台になるのである。

たとえば、台形の面積の公式を「上底たす下底、かける高さ、わる二」と記憶するだけでは、上底と下底を加える理由が見えない。そこで、同じ台形をもう一つ用意し、上下を逆にして横に接してみる。すると、横の長さが「上底たす下底」の平行四辺形ができる。その面積を半分にすれば、もとの台形の面積になる。こう考えると、台形の公式は、平行四辺形の公式から導かれていることがわかる。もし公式を忘れてしまっても、この考え方を覚えていれば、自分で再現できる。理由を理解すれば、一つの発想から、いくつもの公式へ通じる道が開けるのである。

入試には、公式を当てはめるだけでは解けない図形が出る。三角形と長方形が組み合わさった形や、一部が欠けた円の面積を求める問題である。公式だけを記憶している人は、どの公式を使えばよいかわからず、手が止まる。いっぽう、公式の理由を考えてきた人は、この形を、知っている形に切り分けたら、足りない部分を補ったりする道を探す。長方形を半分にして三角形を作った経験が、見慣れない図形を見慣れた図形に変える発想につながるのである。公式を覚える学習と、理由を考える学習とは、見たことのない問題への対応力が大きく異なる。

だから、公式は覚えて終わりではない。公式を覚えること自体を否定はしない。公式を知らなければ、つなげる材料がないからである。しかし、なぜそうなるかを考えると、ばらばらだった公式が一つの考え方のもとにつながる。覚えた数ではなく、つなげられる数こそが、本当の算数の力である。忘れても再現でき、見たことのない問題にも手が出せる。それが、考える学習の強みなのである。

第八回 公式と理由 課題

課題一 筆者の主張を一文で書こう。

課題二 一般論の段落は何段落目だろう。() () 段落目

第九回 ガイドブックと旅

家族で旅行に行く前に、ガイドブックを読んだことはあるだろうか。有名な寺や美しい海の写真が並び、見どころが文章で説明されている。読めば、出発する前から旅先の様子がよくわかる。では、ガイドブックを読んでわかることと、実際に旅をしてわかることは、同じなのだろうか。

たしかに、本や言葉で知れば、十分にわかると言われることが多い。ガイドブックには、写真も地図も歴史も整理されてまとめてある。多くの人は、くわしい本を読めば、現地に行かなくても大体のことは理解できると考える。時間も費用もかからないのだから、そのほうが合理的だというわけである。

しかし、体験には言葉にならない部分があり、その部分こそが言葉を深くする。言葉は、体験を切り取った一部にすぎない。ガイドブックに「静かな寺」と記されていても、その静けさの中で聞こえる風の音や、石段を上るとき足の重さは、記されていない。切り取られなかった部分は、自分で現地に立つて感じるしかない。そして、実際に訪れたあとで同じ文章を読み返すと、「静か」という一語が、まるで異なる重みをもつて立ち上がってくる。言葉は、体験に裏打ちされてはじめて、本来の深さを取りもどすのである。

家族で京都に出かけた。ガイドブックには「清水寺は、高い舞台から市街を一望できる」と記されている。写真も大きく掲載されている。ところが、実際に行ってみると、舞台に立つまでに坂道を長く歩き、人ごみの中で汗をかく。ようやく舞台に出たとき、風が吹き、足もとがはるか下にあることに、わずかな恐怖を覚える。この坂道の疲労も、風も、恐怖も、ガイドブックには記されていない。帰宅して同じページを開くと、「一望できる」という言葉の背後に、あの風と高さがよみがえる。言葉が、体験によって厚みを増したのである。

旅先で名物を食べる。ガイドブックには、その土地の名物の名前と、「素朴な味」といった短い説明が載っている。しかし、実際に店に入ると、店の人の言葉になまりがあり、湯気とともに知らないにおいがたよう。一口食べて、予想より塩からいと感じる。この「予想より」という感覚は、本を読んだだけでは生まれない。自分の予想と、実際の味とのずれを感じること、で、「素朴」という言葉が何を指していたのか、はじめて具体的にわかる。言葉は、体験と照らし合わされてはじめて、確かな意味を持つのである。

だから、ガイドブックは旅の代わりにはならない。言葉で知ることにも一理ある。ガイドブックを読んでいたからこそ、舞台の高さや名物の味に注意が向いたのであり、何も知らなければ見過ごしていたかもしれない。しかし、言葉で知ったことは、体で確かめに行かなければならない。すると、言葉の背後にあったものが見え、言葉そのものが深くなる。旅とは、言葉の外にあるものを取りに行くことなのである。

第九回 ガイドブックと旅 課題

課題一 筆者の主張を一文で書こう。

課題二 一般論の段落は何段落目だろう。() () 段落目

第十回 レシピと料理

家の手伝いで、料理を作ったことはあるだろうか。レシピを見れば、材料も手順も明記されている。そのとおりに作れば、だれでも同じ料理ができるはずだ。では、レシピを読んで知ることと、実際に作ってわかることは、同じなのだろうか。

一般的に、本や言葉で知れば、十分にわかると考えられている。レシピには、材料の分量も、加熱する時間も、正確な数字で記されている。多くの人は、くわしいレシピがあれば、料理はできたも同然だと考える。読んで記憶すれば、実際に作らなくても理解できる、というわけである。

ところが、体験には言葉にならない部分があり、それが言葉を深くする。言葉は、体験を切り取った一部にすぎない。レシピには「玉ねぎがすぎ通るまでいためる」と記されている。けれども、「すぎ通る」がどのような色を指すのか、どれほどの時間を要するのかは、作ってみなければわからない。切り取られなかった部分は、体験によつてしか補えない。そして、一度自分の目で確かめたあとなら、「すぎ通るまで」の一言で、色も、においも、火の強さも想起できるようになる。言葉は、体験に支えられてはじめて、使える言葉になるのである。

はじめてカレーを作る。レシピには「肉を焼き色がつくまで焼く」と記されている。ところが、火にかけてみると、予想より早く油がはね、肉の表面はすぐに白くなる。「焼き色」とは、この白さではなく、そのあとに現れる茶色のことだと、観察しているうちに理解できる。にんじんを切る大きさも、「一口大」と記されているだけで、実際に切ってみると大きすぎて、なかなか火が通らない。こうした失敗を一つずつ経たあとで、もう一度レシピを読むと、短い言葉の一つ一つに、においや手ざわりが伴ってくる。言葉は、体験のあとで深くなるのである。

また、レシピには「塩少々」「しょうゆ大さじ一」とも記されている。しかし、同じ分量を入れても、野菜の水分や火の強さによつて、味は変化する。だから、料理をする人は、途中で味を見る。なめてみて、少し足りないと感じたら足す。この「少し足りない」という感覚は、どのレシピにも記されていない。言葉で表せるのは分量までであり、そのときの味は、舌で感じるしかないからである。何度も味を見るうちに、「少々」という一語が、自分の舌の記憶と結びついていく。言葉は、体験に裏打ちされてはじめて、確かな意味を持つのである。

こう考えると、レシピは料理の代わりにはならない。たしかに、言葉で知ること大切だ。レシピがなければ、何を、どの順で、どれだけ使うかさえわからず、体験の入り口にも立てない。しかし、言葉で知ったことは、手を動かして確かめなければならぬ。すると、言葉の背後にあったものが見え、言葉そのものが深くなる。レシピの外にあるものを身につけるこそ、料理なのである。

第十回 レシピと料理 課題

課題一 筆者の主張を一文で書こう。

課題二 一般論の段落は何段落目だろう。() () 段落目

第十一回 翻訳機と外国語

外国の人に話しかけられて、こまったことはあるだろうか。今は、スマートフォンの翻訳機に話しかければ、即座に外国語に変換してくれる。何年も学習しなくても、言葉は通じる。では、自分で外国語を学ぶことに、まだ意味はあるのだろうか。

世間では、機械のほうが速く、正確で、疲れないと思われる。翻訳機は、何十もの言語を一瞬で言いかえる。単語を忘れることも、文法を誤ることも、疲れて集中が切れることもない。多くの人は、何年もかけて外国語を習得するより、機械に任せたほうが合理的だと考える。

ところが、まちがえ、迷い、時間をかける人間の過程にこそ、意味がある。機械は答えを出せるが、何を伝えたいのか、何のために話すのかは決められない。外国語を学ぶ人は、単語を思い出せずに言いよどみ、相手の表情を見ながら、身ぶりで補う。その誤りや迷いの中で、相手が何を求めているのか、次第に見えてくる。翻訳機は言葉を正確に運ぶが、相手とのあいだに関係を生み出すのは、人のほうである。言葉を交わすとは、情報を移すことではなく、相手とともに意味を作ることなのだ。

家族で海外に旅行し、店で買い物をする。翻訳機に「値段を教えてください」と話しかければ、正しい外国語が即座に出てくる。店の人は答えてくれるだろう。けれども、そこで会話は終わる。いつぱう、学校で習ったばかりの言葉で、たどたどしく値段を聞いてみる。発音が不正確で、店の人が笑いながら聞き返す。もう一度言ってみると、今度は通じて、店の人が「どこから来たの」とたずねてくれる。正しく言えなかったからこそ、会話が生まれたのである。誤りと迷いの時間が、人と人を結びつけたのだ。

英語の宿題で、自分のことを英語で書く課題が出た。翻訳機に日本語を入力すれば、整った英文が即座に出てくる。それを書き写せば宿題は終わる。しかし、自分で書くこうすると、好きな食べ物まで言えても、なぜ好きなのかを表す言葉が出てこない。辞書を引き、知っている単語を並べ、何度も書き直す。できあがった文は短く、誤りもある。けれども、その文には、自分が何を言いたいのかを考えた時間が残っている。翻訳機の英文は正確だが、そこには、伝えたいことを選んだ人の迷いがない。機械は言葉を整えられても、伝えたいことを選ぶのは、人にしかできないのである。

外国語を学ぶ意味は、翻訳機の時代にも残りつづける。たしかに、機械のほうが速く正確である。緊急のときや、専門的な内容を正確に伝えたいときには、翻訳機は大いに役立つ。しかし、たどたどしくても自分の口で伝えようとする時間が、相手との関係を作る。速さや正確さより、迷いながら伝える過程のほうに、人にしかない価値がある。次に外国の人と話す機会があつたら、翻訳機をしまつて、まず自分の言葉で話してみてもいいだろう。

第十一回 翻訳機と外国語 課題

課題一 筆者の主張を一文で書こう。

課題二 一般論の段落は何段落目だろう。() () 段落目

第十二回 計算機と暗算

買い物で、おつりの計算をしたことはあるだろうか。レジは一瞬で正確な金額を表示する。スマートフォンや計算機を使えば、どんな計算も誤らない。では、自分の頭で計算する暗算に、まだ意味はあるのだろうか。

多くの人は、機械のほうが速く、正確で、疲れないと考える。計算機は、けたの多いかけ算でも瞬時に答えを出し、何百回くり返しても誤らない。多くの人は、暗算の練習に時間を費やすより、計算機に任せたほうが合理的だと考える。

けれども、まちがえ、迷い、時間をかける人間の過程に、意味がある。計算機は答えを出せるが、何を計算すればよいのか、何のために計算するのかは決められない。暗算をする人は、およそ三百円くらいと見当をつけ、計算してみても、ずれていればどこで誤ったかを考える。この見当をつける力は、計算機を使うだけでは育たない。そして見当がつく人は、計算機の答えが異常なときにも、それに気づくことができる。答えを出す力と、答えを疑う力とは、別のものなのである。

たとえば、家のおつかいで、千円を持って買い物に行く。牛乳が二百円、パンが百五十円、たまごが二百五十円。計算機があれば、合計は即座に六百円と出る。けれども、暗算をする人は、かごに入れながら、これで六百円ほどだから、あと四百円あると考える。お菓子を一つ加えても足りると見当をつける。レジで合計が表示されたとき、見当と異なれば、何か入れまちがえたと気づける。計算機は、入力された数の合計を出すだけで、入力の誤りには気づかない。買う前に見当をつけ、あとで確認する。この往復の中で、数の感覚が養われていくのである。

また、算数の文章題では、式さえ立てれば、計算機が答えを出してくれる。しかし、式を立てるのは人である。一本八十円の鉛筆を十二本買う問題で、答えが九千六百円と出れば、暗算の感覚がある人は、すぐに異常に気づく。八十円が十本で八百円、十二本なら千円前後のはずだからである。この「前後」という見当があるから、けたの誤りに気づける。計算機は、誤った式にも正確に答えを出す。だから、答えが妥当かどうかを判断する力は、機械ではなく、人が持つていなければならない。暗算で養われるのは、速さではなく、この判断する力なのである。

つまり、暗算で養われるのは、答えを出す速さではなく、答えを疑う力である。もちろん、機械のほうが速く正確なのは確かだ。けたの多い計算や、何百もの数を合計する作業は、計算機に任せたほうが確実である。答えを出すのは機械でよい。しかし、その答えが妥当かどうかを判断するのは、迷いながら計算してきた人の頭である。見当をつけて考える過程こそ、機械には代わりのできない、人の仕事なのである。

第十二回 計算機と暗算 課題

課題一 筆者の主張を一文で書こう。

課題二 一般論の段落は何段落目だろう。() () 段落目